

聞き取り調査

私のシベリア強制抑留体験記

福島県 山口 小一郎

私は元陸軍兵長山口小一郎である。

忘れもしない昭和二十年八月八日未明、ソビエト軍は何の予告もなしに朝鮮北部並びに鮮満国境全域を突破して猛烈な攻撃をしてきた。私たち鮮満国境守備隊は、約二カ月ほど前から、原隊である朝鮮羅南第十九師団歩兵七十六連隊第二重機関銃中隊に編制され、六月初旬、鮮満国境雲霧嶺月明山四〇三高地に陣地を構築していた。突然の攻撃に、米軍なのかソ連軍なのかはわからなかったが、警察隊よりの報告により、攻撃

してきた敵はソ連軍であり、ドイツ・ベルリン攻撃の最精鋭部隊であることがわかった。戦争は激しく、圧倒的に優秀な武器と大軍と機動部隊の前にはなす術もなく、ただ茫然と塹壕の中で見ているよりほかになかった。

第三大隊が馬隆山で全滅したとの斥候の報告により、私たちに課せられた「四〇三高地を死守せよ」との師団命令に、頑強に敵と入り乱れての肉迫戦が展開された。戦闘は十七日夕刻まで展開された。そして十七日の夜「明朝を期して敵陣地に突入、全員玉砕」の命令が下り、夜、分隊長荒井伍長を中心に別れの盃をくみかわした。覚悟はできていてもなかなか眠れなかつたとき、まさに運命の命令伝令が到着した。報告によれば「日ソ停戦協定が成立したので直ちに陣地を撤収し

南陽に転進すべし」の命令であった。直ちに分隊ごとに重機関銃と弾薬二千発をやせこけた馬に積み、南陽に向けて転進した。その途中、ちようど猿によく似た人間が短い銃を抱えて笑っていたのが今でも印象的であつた。ちようど馬蹄形陣地の中に幾万とも知れない日本軍が追い込まれ、ここで日本の無条件降伏であることを聞いて、まさに全身に電流が走つた。物陰で手榴弾で自爆をした下士官候補生や下士官がいた。私は冷静な荒井班長に従い、一体世の中がどうなつたか、また、これからどうなるかをよく見極めねば死ぬまいと言ひさとされ、それに従つた。

すぐに武装解除が始まり、時計、万年筆、鏡、カミソリなどすべてが奪われた。そして私たちの部隊は、神聖なソビエト軍に銃を向け十日間も死闘を馬隆山でした憎むべき軍隊としてレッテルを貼られ、食糧も満足に配給されなかつた。私たちは、タンポポの葉や根、アカザの葉や根など、牛馬のごとく草を食して飢えをしのいだ。これがかつては誉れ高い帝国軍人の姿かと思つと涙も出なかつたし、ただ茫然と夢遊病者のごと

く南陽の收容所でさまよい歩いた。

約一週間と記憶しておりますが、ソ連軍の命令で、延吉の收容所に死の行軍を余儀なくされた。顔はやせこけ、目玉だけが光っている戦友の姿を見ると私の姿も想像でき、無念であつた。どうにかして死のうと何度か思ったが荒井班長の言葉に励まされ、まだ日本本土が全滅したとの報せは受けていないが、日本が連合国に無条件降伏したのだとの報告は十月初旬になつて確実に知らされた。常にソ連軍の銃剣におどされながら、約二週間ほど延吉收容所に收容されていた。約十万といわれる大軍であつた。悪い水をすすり、赤痢が流行し、何人かの戦友が收容所の中で死んでいった。約二週間後再び行軍、まさに十日間の死の行軍が否応なしに続行され、暑さと栄養失調で行軍途中、何人も兵士が倒れ死んでいった。ソ連軍の監視の目をかすめて、道端にある豆、玉葱やニンジン、大根など無差別にとり、泥のまま口に入れた。約十日間の行軍で行き着いたところはクラスキノという平原であつた。十万とも言われた大軍が草原の中で食べられる草を求め

て行動する姿は全く異常で、かつての誇り高い藤部隊の勇士の影はどこにも見受けられなかった。

クラスキノ草原で露營すること約一週間。初めて見たソ連軍將校に通訳が来て、明日クラスキノの駅より汽車でウラジオストツクに行き日本へ帰されるという話を聞いて、最後の力を振りしぼって万歳を唱えた。翌日汽車に詰め込まれ、しかも有蓋車では真つ暗であった。十二時間くらいでウラジオストツクに到着すると言われて乗せられた汽車だが、時計もないが、三日間走り続けてようやく汽車が止まった。有蓋車の窓が開けられた。汚い話だが、満員に詰め込まれた貨車の中では片隅に排便をするしかなかった。もはや人情も友情も消えていた。今思えば出さずとゾツとする出来事である。ここがハバロフスクというところであることは通訳によって知らされて、また、あなた方はこれから一週間ほど汽車に乗り北に向かうということである。私たちは覚悟を決めた。どうせシベリアで射殺されるに違いあるまいと口々に言い出した。荒井班長も冷静さを失い、ただ茫然として私たちを見据えていた。汽

車は北に向かつて昼夜の別なく走り続けていた。ハバロフスクで配給されたのは、私たち日本軍が非常食としていた乾パンであった。水もなく乾パンをかみ、飲み込むにも大変であった。

汽車が止まり下車するよう命じられた。下車した地面はカチカチに凍りついていた。クラスキノを出る時はまだ残暑が厳しかったのに、もう零下十度を越えていた。夏服のままの姿ではどうにもならない。寒さと空腹で倒れそうになった。皆が寄り集まり、体をこすり合って時間を過ごした。通訳が来て、隊列を作り行軍せよとのことで行軍した。約二キロ程度の行軍であったが、どうにも耐え難いみじめなものであった。約二キロほど歩いて行った所に真新しい収容所ができていた。急に造ったのであろうが、何とも寒さをしのげるようなものではなかった。分隊編制がなされ、私は同郷の荒井秀夫上等兵とともに荒井伍長の分隊に編入された。

「歩兵七六交戦部隊」のレットルを貼られた私たちの連隊には、満足な食糧の配給はなかった。人の肉で

も食べられそうな錯覚がおのれを襲い、ハツと気づいてため息をつくのみであった。早く殺してほしい、それが私どもの偽わらざる心構えであった。便所へ行くにも、満足に歩ける者もいなくなっていた。もう人間としての体力の限界まで追い詰められていた。何のためか私たちをこのシベリアに連れてきたのであろうか。何か殺す様子もないように感じられてきた。

約二カ月ほど収容所の中で毎日点呼だけがあり、毎日何人かの人が栄養失調と精神的打撃のために点呼の数が減っていった。私たちの分隊は、収容所の真ん中にジャガイモが積んであるので決死隊を編制し、歩哨の探照灯の死角を利用してジャガイモを盗み、それを皆で平等に分け合つて、タンポポ、アカザ、カイロの葉など食べられる草とともに飯盒に入れて煮て、飢えをしのいでいた。人間としての生活の原点以前の実にみじめで無念な毎日が続いた。時たま歩哨の威嚇射撃が夜空に響き、それはまさに地獄図そのものであった。いかに囚われの身とは申せ、ソ連軍の私たちに対する仕打ちは非人道的処遇であり、死ぬとも、あの笑い、

そして口惜しい思いは忘れません。

その後三カ月ほど経て、分隊ごとに厳冬の中でそれぞれ伐採、鉄工場、建築、煉瓦工場などに分類され、強制労働が強要された。幸いに荒井分隊は煉瓦工場で労働することになり、煉瓦を焼くカマドに入ればシャツ一枚でも熱いくらいで、寒さを避けるには全く不幸中の幸いの強制労働であった。食糧も若干多目に配給されるようになった。食糧と申しても大豆飯盒の蓋一杯、コウリヤンやジャガイモ、岩塩など、日増しに多目に配給されるようになったが、しかしその食は日本人の食事からすれば考えられない。しかもわずかな量であった。煉瓦工場にもノルマ制が適用され、ノルマを達成しないときは極端に食糧が減給となり、分隊全員に迷惑がかかった。

荒井分隊長は早くからロシア語を覚え、煉瓦工場側とノルマの交渉などをして、特別配給品として黒パン、生サケ、塩漬け魚などを工場側より増配させ、体力の回復に努めてくれた。しかし、外で作業する兵隊たちは毎日、何人かの人が死んでいった。死体が倉庫に山

積みされ、春まで丸裸で積みつ放しというすさまじいものであった。冬はビタミンCのとれるキャベツの配給も少ないので、ビタミンC補給のため、エゾ松の葉を飯盒で煎じて飲みながら体力の保持に努めた。とにかく物を食いたいという人間餓鬼道に陥っていた。

昭和二十二年四月、荒井分隊長が肺炎を起こし、九死に一生を得て回復し、私たちと別れて去っていった。私たちは涙、そして大声を上げて泣き叫ぶ者もいた。

私たちの命の親として武装解除より約二年有半、あの人機の転と能力によって私たち分隊は救われてきたのであった。そのため分隊全員、やがて祖国の土を踏みしめることになるが、私も六月に急性肺炎を起こし、早目に祖国の土を踏むことになる。

思い出せば、シベリア強制抑留こそ、物のいかにを問わず、私どもが受けてきた人間としての肉体的、精神的にも限界まで追い詰められた生地獄そのものであり、いかなる理由をもってしても、強制抑留は未来永劫に語り継がなければならない。

平成七年十月十日

追伸 収容所はコムソモリスク第四収容所であります。後の合言葉「死の第四収容所」であります。

シベリア抑留

福島県 七海 登

出生から入隊

大正十三年六月五日、旧郡山市堤字天正垣二八番地、七海家に生まれ、義務教育を修了して更に学校法人安積学館へ入校し、同校を卒業した。

家業の農業に従事し、傍ら青年学校に入校していたが、昭和十八年に徴兵検査を受け、甲種合格となり、昭和十九年十月に朝鮮羅南歩兵連隊歩兵砲中隊に入隊した。同年十一月に沿岸防備に従事し、約四カ月して原隊に復帰していたが、間もなく部隊は朝鮮羅南奏第一四部隊に編入された。

ソ連軍侵攻前後

昭和二十年五月二十日、馬乳山陣地構築隊先発隊と